
戦場のヴァルキュリア ~ ブルールの丘から ~

watershed

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場のヴァルキュリア ～ブルールの丘から～

【Nコード】

N9429X

【作者名】

Water shed

【あらすじ】

国境の街ブルールに向かうガリア義勇軍。

故郷の奪還を目指すギンター少尉率いる第7小隊と共に、同じブルールを故郷とする古参の指揮官が率いる義勇軍第4小隊がいた。待ち構える帝国軍防衛部隊との激しい攻防戦をくぐり抜け、彼らは故郷を取り戻せるのか

今作にはオリジナル要素があります。

0・プロローグ（前書き）

元教師の古参兵のエピソード。

舞台はブルール奪還戦、第7小隊との共闘作戦という設定に。

主人公はプライベート・ライアンのミラー大尉がモチーフ。

アリシアがいた孤児院の先生（保父？）という架空設定にしてみました。

登場キャラもほとんどオリジナル（皆サッカー選手の名前）。

第7小隊の面々も登場予定・・・

0. プロローグ

9月になったとはいえ、昼間ともなれば真夏かと思紛う陽射しが照りつけてくる。丘陵地帯に吹く風が、兵士たちにしほしの涼を与えている。なだらかな丘を染める鮮やかな緑と、延々と続く空の青が視界を埋め尽くしている。

丘を抜ける風が朝露に濡れた草を揺らし、牧歌的な景色に素朴な音を加えているはずのだが、低く唸る戦車の駆動音がそれら一切を掻き消して、兵士たちを「現実」につなぎとめていた。

彼らの「現実」とは、戦争である。

このガリアの地が戦火に飲まれてから半年が過ぎようとしていた。

征歴1935年3月15日、ヴィルトウールの故郷ブルールの街はガリアへ侵攻を開始した帝国軍の奇襲を受け、半日と経たずして彼らの手に落ちた。ヴィルトウールは街の自警団のひとりとして抵抗を試みるも、完全武装の帝国軍に蹂躪される故郷を目の前にして、為す術なく街を後にするしかなかった。

40歳を過ぎるヴィルトウールは、戦前ブルールにある孤児院で身寄りのない子供たちと暮らしていた。彼は元は教師であった。同じく教師で同僚のルーズという女性と出会い間もなく結婚したのだが、数年後に第一次ヨーロッパ大戦が勃発。ヴィルトウールも招集を受けて従軍した。

終戦後、ブルールに帰還するも、ほどなくしてルーズは病に倒れこの世を去ってしまう。ルーズの死後、ヴィルトウールはブルー

ルにただひとつある孤児院で働くようになる。その孤児院はルイズの父が開いたものであり、生前のルイズも子供たちの母親代わりとして過ごした場所でもあった。

ルイズとの間に子供を授かることはなかったが、エリックは孤児院で暮らす子供たちをわが子のように想いながら、義父とともに孤児院を守ってきた。

開戦がいよいよ近いという情勢になり、孤児院を閉鎖し義父と子供たちを首都ランドグリーズへと疎開させていたのだが、ヴィルトゥールは自警団として街に残り、防衛の任に当たっていたのだった。

ヴィルトゥールがブルールを追われて以降、戦況はガリアの敗色が濃厚となっていく。帝国軍は、戦車を中核とした機甲師団による火力と機動力を駆使し、電撃的にガリア領内に侵攻。わずか1ヶ月も立たないうちに首都ランドグリーズの眼前にあるヴァーゼルにまで至る。

首都陥落も想定される事態に陥るが、ランドグリーズへの街道が通る最重要拠点、ヴァーゼル橋の奪還を機にガリア軍が反攻に転じることになる。

そのヴァーゼル橋奪還作戦の先鋒となったのが、ガリア義勇軍第3中隊隷下の第7小隊であった。その第7小隊を指揮したのが、先の大戦でガリアの英雄となったベルゲン・ギンター將軍の息子であるウエルキン・ギンター少尉だった。

若干22歳のギンター少尉は、対岸の敵陣地へ戦車で潜水渡河し奇襲をかけるという作戦を立案。小隊を率いての初陣であったが、これを見事成功に導く。

英雄の息子である青年将校率いる小隊が公国の窮地を救ったことで、一躍彼の名と義勇軍第7小隊の存在はガリア軍内に轟き、反攻の旗印となっていた。

その後も義勇軍第7小隊は、南部クローデンの帝国軍補給基地攻撃作戦、工業都市ファウゼン攻略作戦、マルベリー海岸制圧作戦と、立て続けに勝利を呼びこむ働きを見せ、ガリア軍はいよいよ領内の帝国軍を駆逐しようという局面に転じるに至った。

今回、ヴィルトゥール率いる義勇軍第3中隊隷下の第4小隊は、ギユンター少尉率いる第7小隊とともにブルール奪還戦の戦力として投入され、今まさに街を目指して進軍を続けているのであった。

これから取り戻そうとしている故郷ブルールを去ったあの日、ヴィルトゥールはギユンター少尉に出会った。

ギユンター少尉は、ヴィルトゥールと同じブルールの出身だった。ギユンター少尉は義理の妹であるイサラ・ギユンターと、かつてルイズやヴィルトゥールの下、孤児院で育ったアリシア・メルキオットという少女とともに、故ギユンター将軍がかつて駆っていた戦車でブルール撤退のしんがりとなって戦った。

ヴィルトゥールは前大戦に従軍した際、ギユンター将軍の指揮する部隊の兵士として国境付近の戦闘に参加した。将軍は卓越した戦況把握と無駄のない指揮でガリアへ勝利をもたらすとともに、ヴィルトゥールをはじめ多くの兵士の命を救った。

将軍は戦後ブルールで静かに余生を過ごしたが、戦時中に妻を亡くしたことで、将軍自身も間もなく病に伏し若くしてこの世を去ったこ

と、そして残されたご子息と養女がいることをヴィルトウールは人伝に知った。

その残された将軍のご子息が、ヴィルトウールをはじめブルールの人々の危機を救った。ヴィルトウールをはじめ、前大戦の戦火を知るブルールの者は皆、故郷を去るあの日、ギウンター将軍の姿をひとりの青年に重ねていた。

いざヴィルトウールがギウンター少尉と言葉交わしてみると、まるで軍人の息子とは思えぬほど物腰の柔らかい青年であった。ギウンター少尉を紹介したアリシアからは、彼と初めて会った時住民が避難を始めている最中に魚のスケッチをしていたのだと笑って聞かされた。

将軍の息子と屈託のない笑顔で話す少女は、ヴィルトウールにとって彼女がまだ幼い頃から知る存在だった。

アリシアは、もとはヴィルトウールの働く孤児院で育ち、戦前は街でただひとりマイスターの資格を持つパン職人のもとで働いていた。アリシアはルイーズがまだ病に伏せる以前から孤児院におり、ルイーズが生前よく面倒を見ていた女の子だった。

ルイーズの死後ヴィルトウールが孤児院で働くようになった頃には、彼女は子供たちの中でも年長になっていたので、よく彼を助け子供たちの面倒をみていた。パン屋で修行を始めてからも、練習でパンを焼いたと言っては孤児院の子供たちに届けてくれたりもした。

開戦の気配が近づいて、アリシアが勤める店も営業を止めると彼女は自警団へと入り、持ち前の面倒見の良さから自警団の分団長の任に就いた。そして、あの日彼女は帰郷していたギウンター少尉と出

会ったのだという。

ルイズが居なくなっただけからは自分をよく支えてくれ、子供のいないヴィルトゥールにとっては、アリシアは他の子供たちと同じく娘のように思う存在であった。

アリシアはブルールからランドグリーズへ避難したのち義勇軍へ志願し、ギユンター少尉と同じ第7小隊に配属となり彼の副官となっている。

ヴィルトゥールは不思議な気分だった。

かつて戦場で命を救ってくれた人物の息子に再び窮地を救われ、今は同じ戦場に立っている。その彼を引き合わせてくれたのは、娘のように思い成長を見守ってきた少女で、今は彼の傍らで自分と同じように戦場に向かう身となっている。

3人が目指す先はそれぞれ同じ故郷であるブルールの街

ヴィルトゥールは、第7小隊が進んでいるであろう左手の丘の峰を見つめた。彼らの進む先を照らすかのように、雲間から一筋の光が射し込んでいた。

1・追憶（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

エリック・ヴィルトウール / 少尉 / 小隊長

>ガリア義勇軍第3中隊第7小队<

ウェルキン・ギウンター / 少尉 / 小隊長

アリシア・メルキオット / 軍曹 / 小队副官

1・追憶

眼前にはなだらかな丘が続き、その丘にはまだ青々とした草花が一面に生え広がっていて、少しずつではあるが故郷ブルールの風景に近づいていることが感じ取れた。他の土地の者が見れば同じような景色の連続でしかないかもしれないが、ブルール出身のヴィルトゥールには故郷の記憶を呼び起こさせる情景に映っていた。

朝に補給拠点を発ち、すでに帝国側の勢力圏内に入っていたが、これまで敵部隊との交戦はなかった。この国境周辺のブルール近郊に至っても帝国軍の姿は見当たらなかった。すなわちこの地域一帯に点在していたであろう敵部隊は皆、ナジアルへ向けて移動しているか、防衛本拠点であるブルールの街に集結していることを意味していた。

帝国軍はヴァーゼル橋を奪い返されて以降、ガリア軍の反攻が激しくなったことと、戦線拡大による補給線の延長、及び兵站面での遅れが重なったため各地で敗走を続けていた。ラグナイト資源が豊富な北部の工業都市ファウゼンを失ったことで、帝国軍の衰えはいよいよ本格的なものとなっていた。

帝国軍が局面を打開すべく、総攻撃に備えて主力部隊をナジアルへ集結させつつあるという噂は、多くの兵士の耳にも届いていた。ガリア正規軍をはじめ義勇軍の大半の部隊もナジアルでこれを迎え撃つべく投入されていたのだが、そうした折にあって今回のブルール奪還作戦の命が下った。第3中隊長であるエレノア・バーロツト大尉の肝入りで決まり、本隊に第7小隊が指名されたのだ。

そう遠くない帝国との決戦が控える時期に、連戦が続いているはず

の第7小隊を本隊に据えてまで、戦略的重要性の低い辺境の地であるブルールを奪還する意味があるのかと義勇軍内でも疑問の声が上がっていたという。今や義勇軍随一の精鋭となった第7小隊である。正規軍上層部では決戦の先鋒として第7小隊を据えるべきだと発言する者もいた。

軍上層部はもとより、義勇軍内の反対や疑問の声がある中で発令されたこのブルール奪還作戦。バールロット中隊長自ら上層部に進言した背景には、先月のマルベリー海岸で死傷者を出した第7小隊のことが関係していた。戦死したのは、小隊の戦車操縦士であるイサラ・ギンター伍長であった。小隊長のギンター少尉のたった一人の家族で義理の妹である。彼女の死後、士気が沈んでいた第7小隊を慮って、彼らの再起を期すべく本作戦がバールロット中隊長によって起案された。

これまで長く第7小隊の支援任務についていたランツアート少尉指揮下の第1小隊が待機ということで、ヴィルトゥール率いる第4小隊へ支援任務がまわってきたのだ。ヴィルトゥール率いる第4小隊の任務は街の攻略を担う第7小隊の支援である。ブルールへ向けて進軍中である現在は、本隊である第7小隊の右翼側面を警戒、敗残兵や敵哨戒部隊の発見と掃討の任にあたっていた。

これまで第7小隊とは、ヴァーゼル橋奪還戦、バリアス砂漠の拠点制圧戦と同じ作戦に参加したが、直接支援する形で作戦をとみにするのは初めてのことだった。

「おじさんと初めて一緒に戦う作戦目標がブルールだなんて、すごい偶然だね！」

補給拠点を発つ前夜、ヴィルトゥールはアリシアから声を掛けられ

た。いつもの通り天真爛漫に見えるものの、まだ少し仲間を失った
悲しみを引きずっていること、そして故郷を取り戻すという内に秘
めた決意が彼女の表情から透けて見えた。

「ウエルキンはイサラの死を一人で背負いこんでいるみたいで．．
彼の悲しみは私達の悲しみでもあるのに．．．」

ヴィルトウールが第7小隊の様子を訊ねると、アリシアの顔から強
がって見せていた笑顔が消え、我慢して抑えていた想いをこぼした
のだった。彼女の瞳が悲しみとともに、どこか戸惑いを湛えている
のをヴィルトウールは敏感に感じていた。

それはこれまでアリシアが見せてきた自分や孤児院の子供たち、義
勇軍の仲間を想う純粋な優しさからくるものとは少し違っているよ
うに思えた。

どこか臆病で、しかし深い愛しさを秘めていて、それが故に彼女の
心を惑わせている

「今、アリシアが彼にしてあげられることを素直にしてやればいい。
余計な気を遣わんでいいさ。彼だってアリシアや他の隊員が自分を
想っていてくれることは、ちゃんと分かっているはずだから。」
うんと頷いて精一杯の笑みを返したのだが、戸惑いの色は消えてい
なかった。孤児院で自分や子供たちと無邪気に触れ合っている頃の
ような笑顔ではなかった。

戦争が彼女を変えてしまった。戦争さえ無ければ訪れなかった悲し
みによって、彼女や仲間たちの心を歪めてしまっている。

自分もまた、すっかり変わってしまったのだろうか

2・作戦開始（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<
カレル・ユーゴヴィツチ / 曹長 / 小队副官
グリゲラ / 軍曹 / 戦車長
フローラン・ピレス / 伍長 / 通信兵
ボアズ・エシエン / 上等兵 / 偵察兵
ロワーヌ・バリー / 上等兵 / 偵察兵
アシユリー・プティ / 上等兵 / 戦車操縦士

2・作戦開始

「少尉、帝国の連中はもう引き上げたみたいですね。」

ランドグリース近郊ヴァーゼル市出身の22歳、カレル・ユーゴヴィッチ曹長が、のどかな緑の景色に浮かぶ異物を指して訊いていることは明らかだった。

左手前方に破壊され乗り捨てられた帝国軍のハーフトラックが見えた。以前に哨戒中の友軍にやられた斥候のものようだった。

「ブルールの街も放棄してくれていりゃいいんですけどね。」

続け様にユーゴヴィッチお得意のぼやきが口を衝いて出る。

「それはないな。ブルールは中部と北部の中間に位置している。中部方面に残っている部隊がナジアルを目指すなら、このブルールを経由したとしても不思議じゃない。」

副官のぼやきに対して、少し真面目に言葉を返してしまったかなと思っただが、平静を保って言葉を継いだ。

「バリアス砂漠以南の敵部隊がナジアルを目指して移動するなら、できる限り交戦を避けるためにガリア東部の警戒線を迂回しようとするはずだ。」

「中部の帝国軍はクロードンを失って以降とも補給を受けられず、特に中部の敵部隊は孤立して消耗しきっていると聞いていますしね。」

言葉だけは大真面目に返したユーゴヴィッチだったが、その口調はまだ先ほどのぼやきと変わらない。

「そうなるよと遠回りであつてもこの国境周辺のブルールあたりまで迂回してナジアルを目指すはずだ。大規模な部隊は既に移動を終えていると聞くが、街の防衛部隊と取り残された中部方面の部隊がいくつか集まればそれなりの規模にはなっているだろう。」

「それじゃあ、敵さんの逃げ足が速いことを祈りたいですね。今頃ナジアルで飯にでもありついてくれてりゃ、俺たちに殺されなくて済むわけだし。」

お喋りなユーゴヴィッチは、とどめとばかりに少尉の背中に小言を浴びせた。

ユーゴヴィッチは第4小隊の副官であり、ヴィルトゥールとはヴァーゼル橋奪還戦からの付き合いになる。戦前はランドグリーズの大学に通っていたらしいが、大学の軍事教練課程では多くの学生がそうするような士官候補コースを履修せず、試験的に開かれていた特殊戦闘技能教練課程というコースを選択したらしい。

ユーゴヴィッチが以前語っていた話によると、少数部隊による敵勢力下への潜入、及び破壊工作や後方攪乱等の戦闘技術の習得を目的としたものであるという。

ヨーロッパでは小国であるガリアにとって、戦力の規模では敵国との勝負にならない。いかに数や物量で劣る戦力を駆使して敵国を退けるかという考え方が自然と生まれた。そうした軍内の意見や思想が後押ししてのものか、少数ながら特殊任務を遂行できる特別部隊

創設の必要性がガリア軍内の一部から上がったという。

しかし、部隊創設を待たずして開戦となり、ユーゴヴィツチら候補生たちは正規軍、義勇軍問わずバラバラに振り分けられたという。彼は学徒兵であるため義勇軍に入隊、下士官として第4小隊に配属された。

彼は任務中でも事あるごとにヴィルトゥールや他の小隊員に対してぼやくのがお決まりで、年かさで饒舌ではない小隊長の代わりに、若く年が近い隊員たちへ他愛の無い話を振りまいて隊の雰囲気を経分和らげていた。

いざ銃弾が飛び交う戦場となると、特殊訓練の賜物なのか22歳の青年とは思えぬ冷静さとの確な判断力を見せ、敵の虚を突く指揮をみせる。

「まあ、腹が減っているなら俺たちがたっぷりとコイツを食べさせてやりますけどね。」

ユーゴヴィツチは左手でガリアン小銃を撫で回しながらニヤついてみせた。ヴィルトゥールは苦笑しながら、ちらとユーゴヴィツチの方を振り返った。22歳の曹長は一瞬目を合わせて答えたが、その目は前方の丘の峰にじっと向けられていた。他の小隊員も笑みをこぼしながらも、その目はしっかりと周囲に向けられ、警戒を怠る素振りは見せていなかった。

拠点を発つ頃は辺境のブルールが攻略目標と聞いて、決戦に臨む戦力から外されたと嘆く者もいた。一方で、激戦となるであろうナジアルに行かずに済むのなら、これほど楽な任務は無いと半ばピクニツク気分にいる者もいた。

そんな中、いつものお喋りを装いながら気を利かせたユーゴヴィッチが、ブルーが隊長の故郷であることを隊員たちに説いて回っていた。奪還したら隊長の奢りであつぱり飲み明かそうなどと騒いでいたりもした。

「ヴィルトウル少尉、ギンター少尉から通信です。もう間もなく作戦開始位置に到着することです。」

ユーゴヴィッチの一行後ろを進む南部ガリア出身、25歳の女性兵士フローラン・ピレス伍長が無線通信の内容をヴィルトウルに伝えた。ピレス伍長は小隊付きの通信兵で、戦前はランドグリーズの貿易会社に勤務していた。細面で唇が薄く、少しつり目なのできつい印象だが、大きな瞳は結び上げている髪と同じダークブラウンで、長いまつげが女性らしさを引き立てていた。

くだけたもの言いのユーゴヴィッチとは真逆で、堅苦しく感じる程の生真面目な性格だったが、それ故に小隊の事務仕事も率先してこなし、悪態や文句の一言もなく、よく気が利く女性だった。ユーゴヴィッチや若い男性隊員の卑猥な言葉のやり取りに対して、ピシヤリと厳しい言葉を返すこともある。通信兵としてバロット中隊長や他の小隊との連絡を正確にこなしてくれることから、ヴィルトウルは彼女もまた有能な部下であると認め感謝していた。

「了解だ。貴官の右翼側面を援護しつつ周囲警戒を継続して我々が先行すると伝えてくれ。」

ピレスがヴィルトウルの言葉そのままに無線越しに返答する。よし、とヴィルトウルは小さく頷くとサツと右手を上げて進軍する隊を止めた。

「この先の丘に風車が立っていてそこがブルールの入口だ。街はその風車のある丘を下ったところにあるが、敵が風車小屋に陣地を敷いているかも知れない。あちらは高台にあつてこちら一帯を見渡せる。こちらには遮蔽物がないから狙撃手や機関銃のいい的だ。」

ここまで一気に言葉を継いで一呼吸すると、ヴィルトゥールは隊員たちの顔を見回す。ユーゴヴィツチだけは周囲に目を光らせ警戒を止めていない。

ブルールは丘陵地帯の只中にあり、周囲を小高い丘に囲まれている。それら丘の上に風車が立ち並び、季節を問わず穏やかな風が絶えることのない街であった。ヴィルトゥールの言う風車が立つ丘を越えると、街を見下ろすことができ、事実上ブルールの玄関口となっていた。

歴史的に独立自治の意識が強いブルールは、古くから街の自警団が組織され、市街地は勿論のこと牧草地や農場がある郊外にも日常的にパトロールが行われてきた。街を囲む丘に立つ風車は、郊外の自警団の詰所の役割も果たしており、今は帝国軍が哨戒部隊の詰所として利用している可能性もある。

風車は丘の上にあり視界も良く、石造りで出来ているため機関銃や対戦車砲が据えられているとなると、それなりに厄介な防御陣地に変貌する。

「そこで、まず偵察を出して風車小屋周辺の状況を確認したい。バリ、エシエン。」

ほぼ同時に名を呼ばれた二人がヴィルトゥールに顔を向け直した。

色白でブロンドの長髪を後ろで結んだバリー上等兵は、19歳ながら大人びて見える少女だった。

異国の血が混ざっていると分かる褐色の肌をした21歳のエシエン上等兵は、丸く大きな鼻が特徴的な若者で、いつもユーゴヴィッチのボヤキに人懐っこく笑いながら言葉を返す明るい男だった。

「いいか、姿勢を低くして風車が見える位置まで進め。目視して状況を知らせるんだ。他の者は左右に散開して二人の側面を警戒。前方に注意しながら進め。」

「わしはどうりゃいい!？」

小隊員の後方を進んでいた戦車のハッチから黒い髪を短く刈り込んだ初老の男が顔を出していた。小隊最年長のグリゲラはダルクス人で60歳を超える戦車長であり、小隊内ではヴィルトゥールと同じく唯一前大戦にも従軍した経験がある。

当時は戦車の整備技師兼支援兵であつたらしい。ガリアでも例外なく被差別民族であるダルクス人だが、本人はまったく臆することなく豪胆な物言いで分け隔てなく人と接する器の大きい人物だった。

「戦車は前哨戦の安全が確認できるまで後方に待機だ。」

「了解だ。聞いたか?アシユリーちゃん、道が開けたら一気に突っ走るからな!」

グリゲラはハッチの縁をバンと叩きながら自分の身を引いて車内に向かつて大声でがなった。すると車輛前方にある操縦席上のハッチがガシャンと勢い良く開き、栗色の髪を振り乱した女性兵士が

飛び上がった。

「もう、うるさい！ただでさえ戦車内は響くんだから大きな声を出さないでよー！」

戦車操縦士であるアシュリー・プティ上等兵が丸い童顔をしかめながらグリゲラを睨む。

「砲弾の音よりデカインじゃないか？ジイさんの声は。」

ユーゴヴィッチが周囲の安全を確認したのか、ガリアン小銃を肩に掲げて振り返りながらアシュリーに言葉を掛ける。

「弾が飛んでこないだけ、マシだと思ってくれ！」

大口で笑うグリゲラの前で、むくれているアシュリーがヘッドホンを装着し直す。ピレスも怪訝そうな表情で深いため息をついていた。

明るく豪快で頼りになるグリゲラであったが、女性兵士からはさくさくする評判が悪かった。グリゲラは、誰かれ構わず女性を見ると年甲斐もなく絡んでは身体に触れてくるからだ。ダルクス人で品がなく女好きという何とも恐れ知らずな老兵である。

しかし、根は仲間想いで人情に厚いことをヴィルトウールは理解している。グリゲラは小隊の女性兵士たちを孫や娘のように想い接しているものと思っていた。

「バリーとエシエンは位置についたらすぐに状況報告。その後私の指示で丘の上まで移動を開始する。」

やや強い風が丘の上から吹きつけるのを感じ、風が行き過ぎるのを待ってからヴィルトールはやや低く太い声で言った。

「作戦開始だ。」

3・風車小屋の遭遇戦（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

マシュー・フェルメイレン / 上等兵 / 狙撃手

ダボル・ブラウン / 上等兵 / 突撃兵

テイラー・エリクセン / 上等兵 / 突撃兵

3・風車小屋の遭遇戦

鮮やかな緑に染まった丘をロワーヌ・バリー上等兵は、ボアズ・エシエン上等兵のすぐ後ろに追いて登っていた。前方の丘の峰を見つめながらエシエンに倣って姿勢を低く保ち、小銃を両手に携行して歩を進める。

バリーはエシエン同様、偵察要員であることから他の隊員に比べれば軽装ではあったが、装備を全て身に付ければそれなりの重量にはなるし、姿勢を低くするとずしりと背囊の重みが身体にのしかかってくるのが感じられた。バリーは高等学校までの軍事教練は受けてはきたが、実戦は今回の作戦が初めてとなる。

自分は躊躇無く銃の引き金を引くことができるのか？もし、敵に撃たれたら？バリーは義勇軍に入隊してから何度も自問してきたが、その度に悪い方の答えしか浮かばなかった。

「もうすぐ丘の上だ。頭を引っ込める。」

バリーの2メートルほど先を進む21歳のボアズ・エシエン上等兵は、これが2回目の出撃だった。ただ、最初の出撃はマルベリー海岸近郊での哨戒任務で、帝国軍との戦闘を経験したものの、相手は海岸防御陣地から逃れた敗残兵でまともな反撃も受けぬまま、こちらがほぼ一方的に殲滅したというものであった。これから始まるブルールでの戦いがどの程度のものになるか、はっきりと想像できるほど彼には経験がなかった。

ユーゴヴィッチは丘を登るふたりの兵士を視界に入れつつ、前方（先行する二人の右側面）に視線を集中していた。丘の向こう側がど

うなっているかこちらからは分からない。草地に隠れて敵が待ちぶせているかも知れないこと、もしそうであるなら敵の先制射撃を受けることになり、その最初の一撃を回避するのは難しい。そうなると小隊の誰かが倒れることになる。

移動中に敵と遭遇し戦闘になる場合などは、特に先に攻撃を受けた方は必ず一人か二人はその銃弾に倒れることになる。誰がその的になるのかを決めるのは、ほとんど「運」でしかないことをユーゴヴィッチは知っていた。待ち伏せを喰らった時など、機関銃の斉射を不意に受けて前衛の兵士が悲鳴と血しぶきを上げながらバタバタと倒された。

帝国軍が敗走を始めているとはいえ、ヴィルトゥールが言うようにこの地域一帯の分隊が集まればそれなりの規模になるはずであるし、市街に立て籠もられると単純な数的優位や火力で押し切るうにも、簡単には奪還できるものではないだろうことはユーゴヴィッチも理解していた。

ここまで敵と遭遇することは無かったものの、実際は敵の偵察部隊に既に察知されていることも当然考えられたので、うまくおびき出されたのではないかという不安がよぎった。

とにかく敵に接触する最初のタイミングが最も危険であり、それがこの丘の上になるか丘を越えた街の入口になるか、ユーゴヴィッチはガリアンの引き金に指を当てながらしっかりと歩を進めていた。丘に登る二人が匍匐の姿勢になったのを見て、ヴィルトゥールが少し表情を硬くした。ユーゴヴィッチの方を見やると先行する二人と距離を置きつつ、同じく丘に登り前方右方向を警戒しながら進んでいる。その後ろから19歳の狙撃手マシュー・フェルメイレン上等

兵がGSRスナイパーライフルを構えて後に続いていた。

不意に強い風が吹き、額に玉となっていた汗がパラパラと手に落ちた。そこでようやく、ヴィルトウールは照りつける陽射しと喉の渇きに気が付いた。

先行する二人の偵察兵が止まる。

「歩哨2、機関銃1、対戦車兵1。」

双眼鏡を覗き込むエシエンの声を、手信号に変換して後方の小隊長に向ける。バリーは呼吸が早くなり、身体が小刻みに震えているのを自覚していた。

バリーの手信号をそのままプレスが声にして読み上げた。

「二人を下がらせる。」

ヴィルトウールはプレスにそう告げるとユーゴビッチを見やり、右手でサインを送る。同じくエシエンのサインを見ていたユーゴビッチがヴィルトウールに頷いて見せ、フェルメイレンを草地に伏せさせる。

開戦直前に高等学校を出たマシュー・フェルメイレン上等兵は、風車小屋とユーゴビッチ曹長を視界に捉えていた。地面にべったりと伏せ、青い草の臭いと自分の汗の臭いとが鼻をついた。陽射しの方向に注意しながら、GSRスナイパーライフルの銃口を風車小屋方向に向けた。

フェルメイレンよりも数メートル先を進んでいたユーゴビッチも

また、息を殺して身を隠しながら、風車小屋にいる4人の帝国兵の様子を見つめていた。

右翼の二人が草地に伏せるのを見た偵察兵の二人は、慎重に登り進んだ斜面を後退りした。

「曹長がうまくやるさ。」

エシエンが不安げな表情で見上げるバリーの肩を叩く。彼の笑顔も幾分強ばっているように見えた。

この遭遇戦はほんの数秒で決した。

ユーゴヴィッチがさつと草地から上体を起こし、先制射撃を見舞う。観測手役の歩哨が倒れ、残り3人が、揃って銃声の方へ向き直る。機関銃手が重い銃身を曹長に向けようとするが、射撃を始める前にフェルメイレンの狙撃で頭を撃ち抜かれ、重機関銃にもたれかかるようにしてくずおれた。

歩哨のもう一人が、倒れた射手に代わって銃座に付こうとするが、今度は反対側面からダボル・ブラウン上等兵とテイラー・エリクセン上等兵のマグス短機関銃の制圧射撃を受けて、仰け反るように倒れる。

3人が一瞬で死体となり、ようやく身を隠そうとした重装の対戦車兵がフェルメイレンに首を撃ち抜かれ、血を吹き上げながらばったりと倒れた。

「制圧完了。」

ピレスの言葉の後、ヴィルトウールの合図とともに戦車と待機していた隊員を含め、小隊が一斉に移動を開始した。

小隊が丘の峰に達すると、なだらかな下り斜面が眼下に広がっていた。4人の死体が転がっている風車小屋は、今いる場所よりもやや低い丘の上にはぽつんと立っていて、ブルールの街が見渡せるポイントになっている。

「第7小隊の連中もスタート・ポイントに着くぞ！」

グリゲラが声を上げて指差した方向、左手数百メートル先に連なる丘を数十人の歩兵と2両の戦車が登っているのが目視できた。

「風車小屋内部の安全を確認。」

帝国兵の死体を確認したユーゴヴィッチのサインを、ヴィルトウールとほとんど同時にピレスが読み取っている。ヴィルトウールは周囲を見回し小隊員の遅れがないかを確認して、風車小屋の立つ丘に登りきると大きく息を吐いて姿勢を正した。

「少尉、あれがブルールの街ですか。」

ユーゴヴィッチが風車小屋の出入り口の側に立ち、眼下に広がる街を指して言った。

ヴィルトウールはゆっくりとうなずく。

2棟の背が高い風車を囲むように、木造の建物や石造りの建物が寄り添っているように見える。それは、あの時のままのブルールだった。為す術なく去るしかなかったあの日のままの姿だ。

戦車が一際大きな唸りを上げ、ようやく丘を登り切ったことを小隊員に知らしめた。

「よし、行動に移るぞ。総員、前進だ。」

ブルールを取り戻す

戦車の唸りに呼応したかのように、ヴィルトゥールは胸に荒ぶる感情が沸き上がったが、表情を崩すことなく頬を伝う汗を拭いた。

4・橋上強襲（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

ダヴィド・ゼンデン / 上等兵 / 偵察兵

ピセンテ / 上等兵 / 突撃兵

リリアン・シエーファー / 上等兵 / 支援兵・機関銃手助手

4・橋上強襲

「まず前方の橋を確保する。」

ヴィルトウールの号令で小隊が前進を始める。

ブルールの街は周囲の丘から続く緑の中に、赤茶色の屋根や白い石壁、木組みの建物が寄り添っていて、中心に2棟の大きな風車がケーキに立てられた蝋燭のように突き立っていた。もつとも、蝋燭のように見えるのは、風車の帆や柱が黒く焼け焦げ、所々砲撃によって崩れていたからである。もつとも丘を下るヴィルトウルたちからは、ぼんやりとしか確認できなかった。

グリゲラが無線でアシユリーに方角を指示すると、戦車が唸りを上げて斜面を下りはじめた。歩兵たちもそれに続いて斜面を下っていく。

緩やかに下る斜面には、大小様々な大きさの風車や農具などを保管するための小屋、その小屋から街の方向へ伸びる細い農道、放牧地を囲んでいる柵、点々と立つ広葉樹の木々、背の高い雑草が繁茂し手入れのされていない畑が見える。見渡したところ敵影はなく、家畜たちの姿もない。

ヴィルトウールはまるで学生が描いた風景画のようだなと思ったが、これからこののどかな場所で殺し合いが始まるかと思うと気分が悪くなった。

斜面を下りきった先に小さな川が流れていて橋が架けられている。その場所から川に沿って西に数百メートルの地点には、より大きな

橋が架かっただけで中心部に続く大通りが通っている。この大通りは第7小隊が進むルートであり、街への正面玄関である。

重装備の対戦車兵、支援兵、衛生兵らは戦車の後に続いたが、バリ―やエシエン、マグス短機関銃を携えたビセンテやブラウンら突撃兵らは、戦車に先行して展開していた。先頭のユーゴヴィッチは、点在する農具小屋や畑の脇に立つ木や茂みに身を隠しながら索敵を続けていた。

距離は離れているものの、風車小屋での銃声でこちらの存在は察知されているはずだったが、敵の姿は見えぬ迎撃もない。

身を潜めていた茂みにエシエンが追い付く。ユーゴヴィッチは、左手の木の影に潜んでいたバリ―と20歳のダヴィド・ゼンデン上等兵に前進のサインを送り、後方のビセンテとブラウンに援護を求める視線を送った。

茂みから出て駆け出すと、すぐ後ろをエシエンが続いた。傾斜がさらにゆるやかになり、そして平坦になったところで草地から土の地面になった。ザツザツという地面を蹴る音とともに土煙が上がる。先行する兵士たちの動きを見て、ヴィルトゥールも下り斜面の終わりを目指して駆け出した。

橋を渡った先は街への入口に小道が続いていて、茂みや農具小屋といった遮蔽物が見当たらない。小道の両脇は幾分起伏があり伏せて銃撃を避けられるかもしれないが、街側から迎撃するには絶好のポイントだった。敵がそのポイントを狙うのに格好の場所はどこか、ヴィルトゥールは街の外郭に視線を走らせた。

ユーゴヴィッチとエシエン、左手からバリ―とゼンデンが橋の両脇

から接近する。橋は10メートルもないくらいの長さで、車両がすれ違えるかどうかというくらいの幅しかなく、郊外の住民や農民らが往来するくらいのものであった。

ユーゴヴィッチが橋のたもとに取り付くとその後には3人が続いた。橋の左右に2人ずつ取り付く形になり、後方から戦車が唸りを上げて橋に向かう。橋を渡ると小道が起伏の尾根に沿って曲がりくねりながら街の外郭まで続いている。

その距離は約100メートル。木造の建物、2階建てのアパートなどが間をおいて連なっていて、右手の奥の方は何もなく開けていた。ユーゴヴィッチがいる橋のたもとは、奥を見通すことは出来なかったが、正面の2階建ての建物に敵がいなか頭を出して確認した。

「橋に対戦車地雷などの爆発物はありません。」

バリーがユーゴヴィッチとは反対のたもとはから橋の下を覗き込んで報告した。

「よし、対岸に渡る。援護しろ。」

ユーゴヴィッチがたもとはから橋に躍り出たところで、正面に並ぶ建物の奥の奥に屋根が半壊した家屋があることに気がついた。その家屋はちょうど橋を正面から見下ろすようになっていて、橋の左右のたもとはからは建物の陰に隠れていて見えなかった。

ユーゴヴィッチは壊れた屋根の影で小さく光が反射するのを見逃さなかった。チツという音とともに足下で土煙が上がったところで遅

れて銃声が届き、ユーゴヴィッチは自分が銃撃されたことに気がついた。

「スナイパー！12時の方向！！」

エシエンがよろけたユーゴヴィッチの動きを見て叫んだ。

ユーゴヴィッチは体勢を立て直すと、一気に橋を渡ろうと駆け出した。身体を左右に揺らし、敵に狙いを定めさせないようにジグザグに走った。チツという音と土煙が今度は先ほどとは反対側で起こった。弾は外れていた。

「援護射撃！」

ヴィルトウールが叫びながら橋のたもとに駆け寄ると、土手から上体を覗かせてガリアンを発砲した。間髪入れず、ビセンテとブラウンのマグス短機関銃がけたたましい連射音とともに弾丸をばらまいた。

ユーゴヴィッチが橋を渡り切り、身体を反転させて川側の土手に転がり込んだ。もう一度銃声が聞こえると、ユーゴヴィッチが乗り越えた土手の草がパツと舞った。曹長が身を隠すのを確認するとヴィルトウールらも射撃を中止し頭を引っ込める。

「ここからじゃ距離がありすぎて正確に狙えません！」

ダルクス人のビセンテがわめいた。

「当たらなくとも構わん！注意を逸らすだけでいい！」

戦車が橋に差し掛かる。グリゲラが狙撃のあつたらしい方向に砲塔の角度を変えて、機銃掃射を開始した。狙いをつけると言うよりも雑ぎ払うようにやかましい連射音を轟かせて撃ちまくった。

「行け！行け！」

ヴィルトゥールが小隊員に前進を促すべく叫んだ。兵士たちが間を置いて順番に橋を走り抜ける。戦車が小銃弾を弾く金属音がふたつ聞こえてきた。

エシエンが真つ先にユーゴヴィツチの隠れる土手に飛び込み、渡りきったほかの兵士たちも戦車の影やスナイパーの死角になる場所に身を隠し始めた。

「右から回り込んで進め！」

隊員の半分ほどが対岸に達したのを確認したヴィルトゥールは、ユーゴヴィツチへ川沿いを進むよう指示を送る。

「我々も橋を渡るぞ。バリー、ゼンデン。戦車まで突っ走るぞ。残り援護しろ！」

ヴィルトゥールとほぼ同時にゼンデンが、そのうしろをバリーが続いた。スナイパーの巢となっている屋根から発射炎が2回見えたが、ヴィルトゥールらから離れた橋を叩いただけだった。

「2時の方向！対戦車兵！」

戦車の影から前方を伺っていた17歳のリアン・シェーファー上等兵が叫んだ。ユーゴヴィツチらが回り込んでいる方向に開けた路

地があるのが見えた。よく見ると奥にある家屋の生垣へ繋がるように土嚢が積まれていた。その手前、路地の真ん中に帝国特有の装甲服で身を固めた兵士が身の丈を軽く越える対戦車槍を携えてぼつんとひとり踊り出ていた。

新手の敵に気がついた兵士たちは、上から狙撃兵に狙われているので体勢を低くしなければならず、咄嗟に射撃位置に移動することができなかった。

ヴィルトゥールが橋を渡り切ろうかというところで走りながらその対戦車兵に向けてガリアンを撃った。

対戦車兵はヴィルトゥールの射撃にやや怯んだようだったが、正確に狙われた射撃でないことが分かると、膝について対戦車槍を構えて発射した。

ドンツという低い発射音とともに打ち出された弾頭が煙を上げながら戦車に迫ってきた。橋を渡りきったヴィルトゥールは、弾頭が迫ってくるのを目視するとその場に伏せた。少尉に続くバリーとゼンデンも做って咄嗟に身を伏せる。

着弾の衝撃が、橋の上で腹ばいになった3人の身体を揺らした。

弾頭が戦車側面を保護する左側の装甲板に当たり、ガツンという音とともに炸裂して、装甲板や弾頭の破片を飛散させ、周囲にガラガラとまき散らした。ヴィルトゥールはすぐに起き上がると戦車の車体に沿って前に移動し、スナイパーに狙われないように身体の左側を隠しながら、戦車の装甲板吹き飛ばした敵兵士へ向けて牽制射撃を行った。

対戦車兵が背を向けて陣地へ引き返すと、さらに奥から3、4人の帝国軍兵士が土囊の陣地に飛び込んでくるのが見えた。

「移動しろ！」

ヴィルトールは戦車の車体を思いっきり叩きながら叫ぶと、再びガリアンを路地がある方に向けて撃ち始めた。

「あの路地の頭を押さえる！」

対岸に残っていたピレス、ビセンテ、ブラウンが橋をジグザグに走りながら橋を渡る。狙撃兵の銃撃はもうなかった。

ガリア戦車に損傷を与えた帝国の兵士は陣地に逃げ帰ろうと駆け出した。彼を援護しようとする二人の兵士が路地の左右から半身を出して小火器をこちらに放っている。

対戦車兵は鈍重な装備であるため動きはぎこちなく、こちらから銃撃を浴びせられていることで動揺したのか、可笑しなステップを踏んで踊っているかのようにも見えた。

小隊員らが射撃を加えている方向に、アシユリーが戦車を前進させる。グリゲラが機銃掃射をはじめ、敵対戦車兵の背中を撃ち抜いて滑稽なダンスを止めた。

「行くぞ！」

対戦車兵が倒れるのを確認して、ヴィルトールが戦車に続いて走りだした。仲間が絶命したのを見た帝国軍の歩兵ふたりは、すぐさま路地の影に隠れて姿を消した。

「アシユリーとじいさんが吹き飛ばなくて良かった。」

ユーゴヴィッチは息を切らしながらも平静を保ってぼやいてみせたが、エシエンとエリクセンは曹長の悪趣味な冗談に気の利いた言葉を返す余裕はなさそうだった。

「少尉たちがあの路地を塞ぎにかかる。回り込んで死角をカバーするぞ。」

土手を移動しながらヒョコヒョコと頭を出して位置を確認し、路地の奥が見える角度になるように移動を繰り返す。

土嚢は路地を半分塞ぐように積まれており、敵兵士はもっぱら戦車やヴィルトウルラがいる方向へ、身体を土嚢から出し入れして小銃やマシンガン撃っていた。

ヴィルトウルが戦車の後を進みながら、遠くで銃声が響いていることにやっと気がついた。第7小隊も交戦しているようだった。

数十メートル先に背中に穴の開いた帝国軍兵士が横たわっていて、その死体の上を2番目の死体を作らんとする両軍の銃弾が飛び交っている。

両軍の小火器のアンサンブルに、75mm戦車砲がアクセントを付ける。砲弾は路地に入った家屋の生垣と土嚢の間に着弾し、生垣の枝や葉とともに向かって右端にいた兵士一人を吹き飛ばした。残った左半分の土嚢に被弾した帝国兵の肉片がバラバラと降り注ぎ、悲鳴にも似た叫び声を上げて、砲撃を免れた帝国兵士が路地の奥に逃げ出した。

戦車砲の轟音のあと、ユーゴヴィッチが土手から這い出すと、路地は石畳の急勾配の坂になっていて、3人の帝国兵が駆け上がって行くのが見えた。

「12時の方向！始末しろ！！」

ユーゴヴィッチがエシエンとエリクセンに声をかけ、すぐさま射撃を始める。二人の若い兵士が這い出し、曹長に倣って帝国兵の背中をめがけて小火器を発砲する。

3人のガリア兵が放った銃弾が、坂を登る帝国兵3人のうちのひとりの脚に当たり、膝からくずおれると、今度は銃弾が2つ背中を叩いた。

ユーゴヴィッチら3人が走りだす頃には、ヴィルトゥールらが路地の左側の角に達していた。3人は右側の角を目指した。

家屋の壁にはペンキをぶちまけたような赤い粘度をおびた液体が飛び散っている。立ち込める土煙に遮られながらも、陽光に照らされその色が鮮やかに浮かび上がっていた。埃の臭いと火薬のすえたような臭いに混じって、人間の血の臭いが小隊員たちの鼻をついた。

「ピレス。」

ヴィルトゥールが空になったマガジンを引き抜きながら振り返る。ピレスは立ち込める臭気に顔をしかめていたが、振り返った上官に気がつくやとハッと我に返って気まずそうな表情に変わった。

「す、すみません。」

「第7小隊に繋げ。」

ヴィルトウールが構わずに無線のレシーバーを受け取る。

「こちら第4小隊。南東の出入り口を確保した。南門から川沿いに東へ200メートルほどのところだ。敵の抵抗は小さいが狙撃兵と対戦車兵を確認している。そちらも用心してくれ。」

ヴィルトウールが少し早口に告げる。ユーゴヴィッチらが路地の反対側に達し、家屋脇の土嚢に身を隠しながら路地の奥へ射撃を開始していた。傍らに転がっている、ばらばらになった帝国兵の死体には目もくれない。

「了解。こちらは南門の敵陣地を確保。バリケードを撤去し次第街に入る。」

無線から返ってきたのは、芯のある通る声だった。戦車の駆動音が混じり、時折小火器の発砲音が割り込んでくる。

「分かった。我々は東から回りこむ。援護が必要な時は呼んでくれ。」

「ありがとう。支援に感謝する。」

やや強張った声だったが、はっきりとした口調でギンター少尉が応答した。無線をプレスに返すと、ユーゴヴィッチがさつと前進の合図を送っていた。小隊員らが、小走りに路地に入っていく。

相変わらず血生臭い臭気が鼻をついていた。ヴィルトウールはガリ

アン小銃に新しいマガジンを装填すると力を込めて槓桿を引いた。
ガチャリという音とともに弾丸が薬室に込められるのを確認すると
ふと空を仰ぎ見た。

目眩をおぼえて少しふらつきかけたが、照りつける陽射しのせいか、
すぐそばの血の海を見たせいなのか、よく分からなかった。

5・前衛(前書き)

登場人物

(名前/階級/兵科)

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<
クロード・レイマン / 上等兵 / 支援兵

5・前衛

汗で濡れた袖をまくり、義勇軍支給の腕時計を見やると15時10分前を指している。太陽は幾分西に傾いたようだったが、それでも陽射しはまだ天高くあり、ジリジリと照りつけていた。

丘の上に比べると市街を吹き抜ける風は弱く、そのせいもあって先程の銃撃戦で忘れていた暑さが徐々に不快の度合いを増していた。

「第7小隊が南門を通過。市街に入った模様です。」

ピレスが通信を伝えると、汗で濡れた前髪をかき上げた。戦車上のグリゲラがタバコをふかしてニヤニヤしながらその仕草を眺める。

「ホテルは無傷だといいな。こんな暑さだ、シャワーがないと困るだろ。」

背後からの視線を振り払うように、ピレスが車上の老兵へ向き直り睨みつける。彼女の小さな背中にある通信機が、振り向いた勢いで大きく揺れた。

「軍曹、ホテルは満室だよ。まずは、連中のチェックアウトを手伝ってやらないと。」

曹長が鉄兜を取り、短く刈り揃えられている濡れたブロンドの髪の毛を乱暴に拭い、いたずらっぽく口元を吊り上げて、グリゲラとピレスに交互にウィンクしてみせた。グリゲラがヒヒッと笑い、ピレスがそっぽを向く。

「チエックインにはまだ早い。それにホテルなんて呼べる立派なものはないな。」

年かさの少尉がブロンドの若者と老兵へ言葉を返し、むくれている女性兵士に頬を緩めて見せ無言で諫めた。

「敵はこちらを戦車ごと狭い街区に引き込んで、小突いては後退を繰り返し、見晴らしがきく“狩り場”に誘いこむつもりだろう。」

ヴィルトウールは、先ほど自分たちが走り抜けてきた、狙撃と土囊陣地の交差射撃を受けた方向へ顎をしゃくってから、街の中心方向に視線を投げた。

「恐らく“狩り場”は街の中心、風車塔広場だ。」

3人の下士官は、少尉の言う“狩り場”を敵の本拠点と読み替えていた。ユーゴヴィッチが苦笑いに短いため息を付け加え、ブロンドの頭を掻いた。

「“狩り場”のハンターたちは、さっきのお寒い連中とは数も火力も違う。」

「そのお寒い連中に装甲をもがれたがな。」

皮肉を添えたグリゲラが、先ほど被弾した車体左側面に向かって火がついたままのタバコを放り投げる。被弾箇所 of 応急処置をしていたクロード・レイマン上等兵に当たり、手にしていた工具をガシャーンと地面に落としてしまった。

「街ん中じゃ、さっきみたいに不意を突かれることが多くなる。そ

れにコイツの身動きが取りにくい。お前さんらの盾になる前に、俺とアシユリーの棺桶になっちまうな。」

軍曹の言葉にヴィルトウールが頷く。

ブルールのような道幅が狭い市街地では、戦車の機動力は十分には発揮できない。市街地では接近戦になりやすく、敵は戦車に肉薄して攻撃を仕掛けてくるはずだ。動けなくなった戦車は障害物でしかなくなる。加えて街を極力破壊しないという作戦方針があるので、戦車による火力の優位性もなくなる。

ひとしきり思考を巡らせると、ヴィルトウールは街区を見渡した。

スナイパーが潜んでいた屋根が半壊した家屋にはゼンデンとフェルメイレンが登っていて、市街に続く小道の出口にはエシエンとブラウンが立って市街方向を警戒していた。

「我々の役目は、第7小隊の“エスコート”だ。」

『エスコート』という言葉に3人が顔を上げた。ユーゴヴィツチのような物言いになってはいたが、当のヴィルトウールに本家のような浮ついた様子はなかった。

「俺たちが喰いつかないと、連中は正面からやって来る獲物に群がるでしょうね。」

「ガリアの英雄をウサギにするわけにはいかんな。」

「要するに!」

男たちの応酬に嫌気がさしていたピレスが、遮るように声をあげた。

「我々が先行して敵を引きつけなければいいんですよね!?!」

ユーゴヴィッチとグリゲラが目丸くして顔を見合わせた。ヴィルトゥールは口元を少し緩め、はつきりと頷いて返す。

「役目を全うするまでだ。我々が道を拓く。」

こちらを見つめる3人の小隊付き下士官を見回してヴィルトゥールが語気を強めた。

「装備を確認して前進だ。」

6・市街地攻防（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

ユーリ・フリングス / 伍長 / 衛生兵

ヨアン・ヴィンター / 上等兵 / 対戦車兵

クラレンス・トロハウスキ / 上等兵 / 対戦車兵

6・市街地攻防

兵士たちが石畳の道を進む。

建物が並ぶ場所はやや慎重に、建物が途切れる場所は素早く進んだ。戦車は街区を挟む通りの、視界が良くより広い方を選んで前進した。小隊は街区に面する両端の通りを二手に分かれて進んでいる。互いの死角を補いあうように交互に前進する。建物や小道に敵が潜んでいないか、街区をひとつずつ確認し合いながら風車塔広場を目指した。

「壁際に張り付いて進め。上方に目を配るのを忘れるな。」

少尉の言葉が隊列の先頭から飛んでくる。自分たちの位置よりも西側の大通りの方向から散発的ながら銃声が聞こえる。銃弾は第7小隊に向けられたものと思われた。

「曲がり角は二人ずつでやるぞ。壁際の奴が先に小さくまわる。外側のやつは大きく素早く相棒に続いてまわる。カバーは交互に。」

色白でそばかす顔のテイラー・エリクセン上等兵は、家屋の石壁に背を預けマグス短機関銃を構えて前を進む隊員の後に倣って進んだ。角を曲がると外壁が崩れ中がむき出しになっている建物が現れた。

木製のテーブルや椅子が、部屋の奥へ爆風で吹き飛んでしまったように、脚が折れているもの、真ん中でふたつに折れたもの、原型をとどめていないものもあった。丘からの風が運んだ埃や枯れた木の枝葉が、めくれ上がっているテーブルクロスや焦げたカーペットの

上に堆積している。

外壁に機関銃の弾痕が刻まれたアパートの2階の出窓には、住人が世話していたであろう鉢植えが並んでいたが花はもちろん、干からびた茎や葉すらなく、今となってはただの容れ物だった。

「この道の出口が狩り場の入口だな。」

左翼を進む隊列の先頭にいるユーゴヴィッチが曲がり角に達していた。機関銃の発射音に続いて、応射する小火器の音が鳴り響いた。手信号で2本指を立てて、2名ずつで角を曲がれと合図する。

ダヴィド・ゼンデン上等兵とダルクス人兵士のビセンテが先頭で角を曲がる。ゼンデンがさつと角を覗くと5メートルほど先の2階建ての建物の外壁が屋根から崩れて、瓦礫が道の左側半分を埋めていた。瓦礫を過ぎた右奥には3輪トラックが横向きに駐車しており、通りの奥が見通せなかった。

一帯に敵の姿が無いことを確認すると、ゼンデンが顎をしゃくって相棒に知らせる。ビセンテが外側を追い越して素早く瓦礫の山に取りついた。ビセンテが無事進み出たのを確認して、ゼンデンが通りに入って瓦礫を迂回しようとして外側を追い越すように進む。

左翼のふたりを見届けていたヴィルトウールが、後ろの隊員に合図する。少尉のすぐ後ろについていたエリクセンが角を曲って進み出る。先行した長身のゼンデンが、瓦礫の山を右から回り込もうとしていた。エリクセンがゼンデンに倣い瓦礫を避けるコースを取って後ろについた。

巨大なミシンが動いているかのような規則的な連続音が通りの奥か

ら響く。勿論、音を発しているのはマシンとは似つかない代物であり、針の代わりに7・92mmの弾丸が人間の身体に穴を開けるべく唸りを上げていている音なのだ。

大通りで唸っているであろう機関銃の音を合図に、その3輪トラックの影に取りつこうとエリクセンが小走りに駆けだす。

今度はマシンガンとは比べものにならない大口径の砲が放たれる音が響き渡った。反射的に視線を上げると、3輪トラックのさらに先に隣の街区に面する通りが走っていて、沿うように立つ石塀の所々崩れている隙間から発射炎が瞬いて、いかつい鋼鉄の肌が照らされるのを微かに捉えた。

その正体を認識するよりも早く、ビリビリと空気を揺らす振動が知覚され、脚が地面を離れて身体が右斜め前に吹っ飛んでいた。3輪トラックの車体に打ち付けられるのと同時に着弾の衝撃と爆音が鳴り響き、一瞬視界が真っ白になった。

「戦車だ!!!」

誰かが叫び声を上げたが、爆音で聴覚を奪われたエリクセンには届かなかった。通り一帯に瓦礫がガラガラと降り注ぎ、埃と煙が立ち込める。砲弾はゼンデンとエリクセンが迂回した瓦礫の山に着弾したようだ。

バタバタと宙を泳いでいたエリクセンの脚が地面を捉え、よろけながら何とかトラックにもたれかかると、立ち込める土煙と瓦礫の雨の向こう、半壊になった建物の角に仰向けになってうめいている味方の兵士が見えた。

「しつかりしろ!!」

ユーゴヴィッチが倒れていたビセンテを抱き起こし、後ろに引きずっていった。鉄兜が飛ばされ、顔が真っ赤に染まっているのが見えた。ビセンテが横たわっていた地面にパツと小さな土煙がいくつか立ち、それが敵の銃撃であること、そして音が聞こえないことをエリクセンはようやく理解した。

「正面だ！撃ち返せ！」

帝国兵の姿も、戦車の車体もヴィルトゥールからは見えていなかったが、二人の隊員が潜んでいるトラック以外の方向へガリアン小銃を撃ちまくった。

「11時の方向に敵戦車!!」

ユーゴヴィッチが戦車の死角までビセンテを引きずっていくと、すぐに身を屈めて正面へ応射を始めた。ヴィルトゥールが曹長の射撃方向を目視しようと曲がり角から身を乗り出した。

砲撃で瓦礫が吹き飛んだことで、通りはやや見通しがきくようになっていた。3輪トラックの先、通りの左側には崩れた石塀が続いていて、隣の街区との間に横道が走っていた。距離にして、トラックから20メートルとない。

戦車は帝国軍の一般的な赤褐色ではなく鈍色のカラーリングの中戦車で、その横道の角に立つ石塀の風穴からこちらへ砲身を向けている。小火器による迎撃もその戦車が居座る十字路一帯から向けられているようだった。

「散開しろ!!」

曲がり角に潜んでいた兵士たちが身を低くしながら通りに展開する。ある者は、ユーゴヴィッチのいる半壊した建物の影に小走りに向い、ある者はトラックを遮蔽物にして見を低くして忍び寄った。

ヴィルトゥールも3輪トラックの影に飛び込もうと駆け出していた。通りに踊り出でず、石塀の風穴から発射炎が見えたので、ヴィルトゥールは一瞬背筋が凍りつくのを感じた。

砲弾は先ほど自分たちが潜んでいた曲がり角の正面の建物に命中し、木材やレンガといった様々な建材を粉々にして飛散させた。とどまっていたら爆風と瓦礫による死のシャワーを横から浴びていただろう。

ユーゴヴィッチら左翼についていた隊員は、壊れた家屋に踏み入って残っている壁などを遮蔽物にしながら、十字路一帯に小銃や短機関銃による制圧射撃を加えていた。

十字路には鉄骨をぶつちがいにした障害物が設置されていて、自分たちのいる家屋と同じような崩れた建物の影から、数人の敵兵士がわらわらと湧いて出てきてこちらに小火器を撃ち返してきた。

ヴィルトゥールが素早くトラックの影に滑り込むと、その後をピレスとバリー、長大なランカー対戦車槍を担いだクラレンス・トロホウスキ上等兵と、小隊最年少のヨアン・ヴィンター上等兵が続いた。

「次はこのトラックが吹き飛ばすぞ!素早くやれ!」

ヴィルトゥールは手榴弾を取り出すと、バリーとピレスがそれに倣

った。土煙で顔を黒くしたゼンデンと駆け寄ってきた仲間を見て気を持ち直したエリクセンがトラックの前方の射撃位置ににじり寄った。

手榴弾のグリップの柄の端にあるピンを引きぬいて、トラック越しに思いっきり放り投げる。女性兵士ふたりも小隊長に倣ってトラックの向こう側、十字路の方向に思い切り投げ込んだ。それを見てゼンデンとエリクセンが身を乗り出して引き金を引き絞った。

トラックから左斜め後方にいたユーゴヴィッチは、トラックの影からの3人のスローイングを見て、激しくガリアンを対角の建物に撃ち続けた。3つのうちひとつは障害物の手前、もうひとつは障害物を越えて十字路のほぼ真ん中、3つ目はさらに奥の敵が潜んでいる家屋の影にそれぞれ転がり込んだ。陣地に入ったふたつを投げ返そうと、それぞれ帝国軍兵士が咄嗟に反応したのをユーゴヴィッチは捉えた。

障害物の方へ小銃弾を撃ち込むことを選択すると、もうひとつの選択肢だった方から手榴弾が投げ返されるのが見えた。

3つはほぼ順番に炸裂した。ふたつは障害物の前後で破裂し、うちひとつはラグナイトによる青白い発光に混じって赤いしぶきが舞い上がった。投げ返された、最後のひとつは自分たちの射撃位置のすぐ手前で炸裂した。

「あの家だ！！もう一回やれ！」

身を翻して爆風を回避したユーゴヴィッチが後ろの隊員へ叫んだ。すぐにエシエンがライフルの銃身にランドグリーザー（榴弾発射器）を取り付けにかかる。対角の家屋からの射撃は、今度はこちらでは

なく手榴弾の投擲位置であるトラックの方へと向けられていた。

ヴィルトゥールが周囲の部下にトラックから離れるように指示しているのが見える。4人の兵士が通りを少し戻りながら、ユーゴヴィツチたちがいる家屋を目指して通りを横断しはじめた。

ユーゴヴィツチは、トラックのボンネット越しに応射していた長身の兵士がスローモーションで仰け反るように倒れるのを見て、顔から血の気が引いていくのを感じた。

「援護しろ！！」

曹長の声と同時に応射が再開され、ほどなくランドグリーザーのバズという発射音が続く。ユーゴヴィツチは斜め前で倒れているのが、ゼンデンであることに気がついた。ゼンデンのすぐ横にいたエリクセンが負傷した仲間を抱き起こすと、肩を抱いてトラックから離れた。

ランドグリーザーから発射された榴弾は、人間が投げたものより遙かに速く正確に目標に達した。榴弾は建物の奥に飛び込んで炸裂し、壊れて大きく口の開いたような建物の1階部分から、粉々になった家財道具と一緒に人間の肉片を伴って吐き出された。

直後、3度目の砲声が轟いてトラックの後部が吹き飛ぶのがはっきり見えた。トラックから離れた位置でヴィルトゥールが投げ出されたが、すぐに立ち上がり再び移動を始めた。さらに離れた位置では二人の兵士が折り重なって倒れるのが見えたが、小柄な方の兵士がすぐに起き上がると、長身の兵士を抱えて同じく移動を始めた。

敵の戦車が唸りを上げて、横道をスライドするように動き出す。バ

リケードと半壊した家屋の陣地を叩かれ、死角に潜んでいたユーゴヴィッチたちの位置に気がついたようだった。十字路の真ん中に姿を見せた戦車は、横切るように移動しながら、砲塔をゆっくりとこちらに向けて狙いを定めてきた。

敵の歩兵がほぼ一掃されたのを見計らって、トロホウスキとヴィンターの小隊付き対戦車兵二人が家屋前の瓦礫を越えてトラックの前へ躍り出た。砲塔に狙いを付けられたユーゴヴィッチら数人の兵士が潜んでいた家屋から一目散に飛び出す。

戦車の砲塔が次弾を発射するよりも早く、二人の対戦車兵が放ったランカーの弾頭が車体を捉えていた。片方は戦車側面のスカート装甲板を吹き飛ばし、もう片方は本体側面に当たって炸裂した。

対戦車槍の衝撃でガクンと揺れて移動が止まったが、今度はこちらに車体正面を向けようと旋回を始めた。今の攻撃で主砲が動作不良を起こしたか、次弾装填が間に合わないとみて車体前面の機銃を向けようとしている。

ヴィルトゥールは戦車の視界から脱していないゼンデンを抱えているエリクセンに気がつくやと夢中で二人のもとに駆け出した。

二人に手が届こうとしたとき、先ほど自分たちが潜んでいた曲がり角、自分たちを挟んで敵戦車の反対方向からグリゲラの駆る戦車が姿を現すのが見えた。咄嗟に二人を伏せさせ自分もその場に伏せると、徹甲弾が唸りを上げて頭上を過ぎていくのを刹那に見た。

ガンツという金属がひしゃげる音の後、ややあつてからくぐもった爆発音が通りに響き渡った。

「少尉！無事ですか！？」

ピレスの問い掛けにヴィルトゥールは手で合図し、庇ったふたりの兵士へ視線を投げた。エリクセンとバリーに抱き起こされたゼンデンは胸の上部を撃ちぬかれていた。苦痛に歪む顔は黒く汚れ、汗で濡れていた。

戦車の後に続いていた、小隊付き衛生兵のユーリ・フリングス伍長が駆け寄って、医療キットのカバンから、ラグナエイドを取り出す。戦車が停車し、砲塔のハッチからグリゲラが飛び出してきた。

「遅れてすまない。地雷の始末に手間取っちまって・・・」

グリゲラは戦闘の痕跡を確かめるように通り一帯を見回しながら言った。

ヴィルトゥールは一帯に鳴り響いていた銃声が止んでいたのに気がついて敵を殲滅したのだと悟った。

銃声の代わりに、何度も同じ名前を呼ぶ声が聞こえてきた。怒声にも近かった声は次第に震えながら泣き声に近くなっていた。

「少尉。」

ユーゴヴィツチが近づいてきたのを見て、ヴィルトゥールはゆっくりと立ち上がった。副官の方は見ず、今ではもう泣いている兵士の方を見やった。

ピセンテの傍らに跪いてボアス・エシエン上等兵が泣き声を上げていた。今は動かなくなったダルクス人の兵士は頭から右顔にかけて血で真っ赤に濡らしていた。

ヴィルトウールは、しばしビセンテと泣いているエシエンを見つめてから、傍らに集まっていた3人の下士官へ向き直った。

「負傷者の手当てを急げ。残りはすぐに前進だ。」

ユーゴヴィッチ、ピレス、グリゲラは頷くだけで何も言わなかった。

大通りからの銃声と砲声が間近に迫ってきているのを感じ、下士官3人は踵を返してヴィルトウールから離れていった。

ユーゴヴィッチが近づいてきたのを見やり、エシエンが立ち上がった顔を拭くと鉄兜を被り直して歩き始めた。

上等兵が戦場に戻るのを見届けて、ヴィルトウールも歩き出した。

7・死闘の序曲(前書き)

登場人物

(名前/階級/兵科)

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

ドワイト・ブームスン / 伍長 / 突撃兵・軽機関銃手

7・死闘の序曲

ブルールの街を囲む緑の丘を進んでいたのが1時間前のことだったが、その間に陽が西に傾きかけていた。オレンジ色に染められていく街は、小さく素朴な田舎街であった。それ故、いたるところに残る破壊の痕が街のスケールに比して大きく痛々しいものに映る。

第4小隊付きの通信兵である、25歳のフローラン・ピレス伍長は、街の中心部へ歩を進めるにつれて、錯覚に近い既視感が胸に立ち込めてくるのを感じていた。

2階部分が完全に崩れ落ちた建物や、部屋と部屋を隔てる壁が吹き飛んで、ぶち抜かれているアパート、建物の骨組みさえも焼け落ちて、粉々になった瓦礫だけがぶちまけられた道。道の石畳が見える箇所も所々剥がれたり、砕けて穴が開いている。

破壊の様だけを見れば、辺境のブルールも首都近郊のヴァーゼルの街も変わらなかった。ヴァーゼルはピレスが経験した最初の戦場だった。そして、結婚の約束を交わした相手が命を落とした街

ピレスの婚約者は開戦初期の混乱の中、義勇軍に召集されヴァーゼル防衛の任にあたる部隊に配属された。帝国軍の侵攻があまりにも早く、ヴァーゼルの防衛部隊はまともな戦力が整わないままでの戦いを強いられ、その兵力のほとんどを失った。

ヴァーゼルの戦いで婚約者が戦死したと伝えられたが、己の目で事実を確かめなければ到底信じることができなかった彼女は、すぐに義勇軍へ志願し婚約者が散った戦場に自ら向かう道を選ぶ。

第4小隊に配属されたピレスは奪還戦を戦い抜いた後、ヴァーゼルの廃墟の中を亡き婚約者の影を求めて彷徨い歩いた。寒々しいほどに何もかもがその姿を消された街を歩き、彼の後を追って自分も消え入りたいという思いがこみ上げてきた。

絶望しか残っていないなかったピレスだったが、ヴィルトウールやユーゴヴィツチらヴァーゼルをともに戦い抜いた小隊の仲間、また命を落とした小隊の仲間が存在に背中を押されるものを感じた。皆、何かを守るために戦っている。死んだ婚約者と同じように、愛する誰かを守るうと戦っている者もいる。悲しみが癒えることはないが、ピレスは死んだ婚約者の思いに報いるために、前を向いて戦いを続けることを選んだ。

目の前の戦いを生き抜いて勝利すること、それがこの戦争を終わらせるための一番の近道。戦いを終わらせることが、死んだ彼に対する償いになる

ピレスは目を閉じ深くゆっくりと呼吸をした。再び目を開けると、前方に広場への入口が見えてきた。

小隊は、衛生兵のフリングスと胸を撃たれたゼンデン、脚に軽症を負ったエリクセンを残し前進を再開した。戦死したピセンテもフリングスらのもとにいる。

小隊は、通りを埋める瓦礫の間を縫うように進んでいた。第7小隊からの通信によると、街の中央広場に近付くにつれて、敵の抵抗が激しさを増しているという。

大通りは地雷や障害物で戦車の通行を困難にし、瓦礫や建物で巧妙に隠蔽された対戦車砲や機関銃からの迎撃が不意を突いて襲いかか

つてくる。また、高所に複数潜んでいる狙撃兵に歩兵が釘付けにされ、速やかな攻略ができずにいるらしかった。

第4小隊は大通りを迂回するように東側の街区を抜けて風車塔広場を目指した。帝国軍の戦車と歩兵数人を殲滅した通りを直進していた。

先頭のヴィルトゥールが通りの出口にたどり着くと、後続の兵士たちへ手のひらを返して止まれと合図する。ヴィルトゥールは2階部分が吹き飛んだ建物にぴったりと張り付いて、角からさつと顔を出して広場方向を見渡した。

広場には、背の高い大きな風車塔がそびえ立っていて、今いる家屋から100メートルとない距離にあった。

ヴィルトゥールは一瞬のうちに3つの目標物をその目に捉えた。

翻る帝国軍旗と、2つの砲塔を備える重戦車、土囊の銃眼から覗く機関銃

大通り沿いの街路樹の植え込みに、さらに土囊を積み上げて作られた陣地から重機関銃の太い銃身が突き出しており、大通り方向をさかんに撃っている。

その機関銃陣地より後方の風車塔に近い位置に、先ほど破壊した中戦車よりさらに大きい重戦車が、機関銃と同じ方向を向いて控えている。ただ、エンジンが動いている音も様子もない。駆動系統が損傷しているのかもしれないが、こちらからは確認できなかった。

ふたつの目標物のさらに奥、バリケードや土囊で二重、三重に築か

れた陣地に軍旗が翻っていた。広場に響き渡る銃声は、主にそこから大通り目掛けて放たれた小火器のものようだった。

ヴィルトウールが頭を引つ込めるのと同時に、顔のすぐ横の石壁が銃弾で削られ、より大きな銃声が届いた。破片が顔の左側を叩き、ヴィルトウールは呻いた。

「敵本拠点だ。機関銃に重戦車、10時の方向、距離80。第7小队を狙ってる。」

「それに狙撃兵。」

ユーゴヴィッチの声に構わず、ヴィルトウールは目をこすり、細かな破片を掻き出している。左頬の裂傷に血が滲み出て、しかめた少尉の顔はひどく疲れて汚れていた。

「連中は正面の防御に必死だ。我々は敵の側面から注意を引きつける。」

「まずは鷹の目を潰したいですね。」

曹長の視線を感じ、ヴィルトウールが左頬の血を拭う。

「エサに喰いつかせて、顔を出したところを仕留めるぞ。」

フェルメイレンを見やり、ヴィルトウールが背囊の紐を解いて背負っていた装備を下ろし始める。

「機関銃を排除できれば彼らの道を拓いてやれるが、ここからでは角度がなくて狙えない。強固に守られているから、接近して上から

叩くしかない。」

「1ブロック戻って裏から近づけば、マシンガンの鼻先に出られま
すね。」

ユーゴヴィッチがもときた道へ親指を立てて指し示す。

「分かった。隊を分けよう。」

ヴィルトウールが言い終わる頃には曹長の方を見つめていた。機関
銃破壊の指揮を取れという意味だった。

「曹長たちが銃座を潰したら、第7小隊とともに一気に攻勢を掛け
る。」

ふたりのやり取りを見守っていた小隊員たちが頷く。ヴィルトウー
ルはこちらを見つめるいくつもの顔に、ひとつひとつ目を合わせて
応える。

傷つき汚れて疲労に顔を歪める者、恐怖に目を見開いている者、不
安に駆られ固く口を引き結んでいる者。一人ひとりに、まっすぐな
眼差しを返す。

「よし、始めよう。」

ユーゴヴィッチがエシエンとブラウン、ヴィンターを従えて来た道
を駆け戻る。戦車脇を通り過ぎると、車上のグリゲラが身体を引っ
込めてハッチをバタンと閉じた。

走り去る曹長らの背中を見送ったピレスは、残った隊員たちを見回

した。

バリーがヴィルトゥールと同じように背囊や装備を下ろし、囃役に成り代わろうとしている。レイマンが新しい弾帯をシェーファーに渡すと、彼女はそれをヴィルトゥールに次いで年かさのドワイト・ブームスン伍長に渡した。伍長は弾帯をベルト給弾式に換装されたT-MAG軽機関銃に装填するとコツキングレバーを引いた。トロホウスキは対戦車槍に新しい弾頭を据え付けていて、フェルメイレンはスナイパーライフルのスコープを覗き込んで見え方を確認しているようだった。

ピレスがその様子を眺めていると、ヴィルトゥールと目が合った。男は小さく頷いて視線を外すと、小銃に新しい弾倉を差し込んで積桿を引いた。ピレスは無言のまま、男に倣って頷き返すと、自身の装備の点検を始めた。

銃声が相変わらず広場から轟いていたが、隊員たちに言葉はなかった。彼らはこれから始まる殺し合いの準備を淡々と進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9429x/>

戦場のヴァルキュリア ~ブルールの丘から~

2011年10月28日15時20分発行